2021/07/25　七里教会　　最上光宏

「あなたの子は生きる」　ヨハネによる福音書 4:43-54

今日の聖書の箇所は、イエスさまがガリラヤで行われた「2回目のしるし」(54 節)です。1回目の「最初のしるし」は、以前2章で学んだガリラヤのカナで行われた奇跡です。イエスさまは、イエスさまはその村の結婚式に列席しておられて、祝い酒であるぶどう酒が無くなった時、水をぶどう酒に変えて、その祝宴を支えられました。今日の2度目の奇跡も、同じガリラヤのカナでなされた奇跡です。

イエスさまが生まれ育ったのは、同じガリラヤのナザレという村でしたから、ガリラヤ地方は、いわばイエスさまのホームグランドです。イエスさまは、かねてから「預言者は自分の故郷では敬われないものだ」と言っておられました。それは、自分の小さい時からのことや、家族のことなどみんなからよく知られていて、そういう固定観念で見られるからです。しかし、イエスさまは、そう言いながらも、敢えてユダヤからガリラヤに戻って来られて、このガリラヤ地方で、神の国の福音を宣べ伝え、力あるみ業をなさったのです。それは、この地方は、エルサレムから遠い僻地で、人々からあまり注目されない、「陽の当たらない」地域であったからです。イエスさまは、都会で、学者たちと論争したり、人々の脚光を浴びるような目立った生きかたよりも、こうした地方で、美しい自然の中で、貧しく純朴な人々と共に生き、彼らのために仕える歩みを志されたのです。そのようなイエスさまの生き方が、次第にこのガリラヤ地方の人々から受け入れられるようになったものと思われます。

今日の 45 節を見ると、「ガリラヤにお着きになると、ガリラヤの人たちはイエスを歓迎した。彼らも祭りに行ったので、そのときエルサレムでイエスさまがなさったことをすべて、見ていたからである」とあります。この「エルサレムでイエスのなさったこと」とは、2章 13 節以下に記されていることです。過越の祭でエルサレムの神殿に行った時、イエスさまはその境内で、両替人たちや、供え物の羊や牛、鳩などを売って商売している人たちを見て、「わたしの父の家を商売の家にしてはならない」と憤って、縄で鞭を作って彼らを追い出し、「宮清め」をしたのです。これは祭司たちが、私腹を肥やすために開かせていた市場だったのです。地方から何日もかけ神殿に礼拝に来た人たちは、捧げものをするために、まず神殿だけに通用するシケルという貨幣に両替し、犠牲として捧げるための羊や鳩、牛などを買わなければならなかったのですが、そのために多額の両替料をとられ、聖別された家畜ということで、高額なお金を搾り取られる仕組みになっていたのです。神殿は、なによりも「祈りの家」であるべきでした。それを商売の家にしてしまったことにイエスさまは強く抗議したのです。そのような

イエスさまの振る舞いは、祭司たちから憎まれる結果になり、それが後に、イエスさまが訴えられる口実にもなったのですが、ガリラヤなど遠くの町や村から礼拝にくる人々からは喜ばれ歓迎されたのです。イエスさまは、常に、弱く貧しい民衆の立場に立って、人々のために働かれ、その命を削られたのです。

さて、このようにしてイエスさまがガリラヤに戻られ、カナの村に再び行かれた時のことです。そこにカファルナウムの町から「王の役人」がやってきて、自分の息子が病気で死にそうだから、すぐカファルナウムまで下って来て、癒してくださるように頼んだのです。この「王の役人」とは、ガリラヤの領主ヘロデ・アンティパスに仕える役人です。この領主ヘロデは、狡猾残忍な王で、後にバプテスマのヨハネの首をはねた人です。その王に仕える役人からの願いです。普段、役人風を吹かせて、横柄に振舞っていた人かもしれません。しかしどんなに普段、偉そうに高慢に振舞っていた役人であっても、自分の大切な息子が瀕死の病にかかったら、自分の身分や立場など構ってはおられません。イエスさまの前にひざまずいて必死に願ったことでしょう。人々は、「こんな時ばかり、頭を下げて…」と思ったかもしれません。しかし、イエスさまは、この王の役人に対しても、一人の人間として、子どものことで真剣に悩んでいる一人の父親として、向き合われたのです。

イエスさまはこの役人にはっきり言いました。「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」と。イエスさまは、相手が王の役人だからといって、特別扱いはしませんでした。この役人は恐らく、以前カナの婚礼で、イエスさまのなさった最初のしるしのことを耳にして、自分もその不思議な業にあずかりたいと思って、イエスさまのもとにやって来たのでしょう。イエスさまは、しるしや業を見て、ご利益にあずかろうとする姿勢ではだめだ。「見ないで信じる信仰」が必要だ、ということを言われたのだと思います。

これに対して役人は、「主よ、子供が死なないうちに、おいでください」と懇願したのです。この「主よ」というイエスさまへの呼びかけは、イエスさまを救い主として信じますという信仰を言い表した言葉です。彼は、役人としての立場からではなく、イエスを主と告白する信仰者として、主に祈ったのです。「子共が死なないうちに、おいでください」と。そこには、息子の父親としての必死さがみられます。

イエスさまは答えられました。「帰りなさい。あなたの息子は生きる」と。「帰りなさい」。もしも、イエスさまのこの言葉がただ「帰れ!」という、冷たい言葉であったら、彼は絶望するしかなかったことでしょう。「一緒にカファルナウムまで下って来て息子を癒してください」と頼んだのに、「帰れ!」と言われたら、拒絶されたのと同じです。しかしイエスさまの語られた「帰りなさい」という言葉には、「あなたの息子は生きる」

という、思いもよらない慰めに満ちた約束の言葉が加えられていたのです。

この役人は、この言葉を聞いて、信じて、息子の待つカファルナウムの家へと急いだのです。　カナからカファルナウムまで距離は約 30 キロと言われますから、一日路です。彼が直ちに帰路についても、夜中にならなければ、家にたどり着くことはできません。夜道を急いで下っていく途中、家の僕たちが主人を迎えに来て出会ったのです。「息子は大丈夫か」彼はまずそのことを問うたでしょう。「息子さんは生きています。元気になりました」。僕たちの返事にこの父親は、どんなにホッとしたことでしょう。そして、僕たちに、病気が良くなった時刻を聞くと、僕たちは「きのうの午後 1 時に熱が下がりました」と答えたのです。その時刻は、丁度イエスさまが「あなたの息子は生きる」と言われたのと同じ時刻であった、というのです。

子どもの熱が下がった時刻と、主イエスが「あなたの息子は生きる」と言われた時刻が同じであったということについて、「それは偶然の一致だ」とか、「たまたま一致したに過ぎない」とみなす人がいるかもしれません。しかし、この父親にとっては、どうしても、イエスさまの語られたみ言葉が、自分の息子に命を与え、癒してくださったとしか、思えなかったのです。彼はイエスさまを主と信じ、「あなたの息子は生きる」と言われた主のみ言葉を信頼し、すべてを主に委ねたのです。その信仰によって、息子は生きる者となったのです。彼はそのことを悟らされたのです。

彼は、以前は、主イエスが言われた通り、「しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」という、そういう自分の認識や判断を中心にした合理的な考え方をしていたのですが、自分の息子の病に直面し、自分の力ではどうすることもできない無力さを痛感し、すべてを主の御手に委ねて、そのみ言葉に従ったことにより、自分の思いをはるかに超えた主の力ある御業にあずかることが出来たのです。

信仰は、見て納得して信じるのではなく、見ないで、聞いて信じることなのです。この父親は、王の役人という立場上、人々の前で権威を振るい、自分の弱さを見せず、背伸びをし、肩ひじを張ったような生き方しかして来なかったのですが、息子が病にかかり、生きるか死ぬかという大きな試練に見舞われる中で、打ち砕かれて、自分を無にして、ただひたすら神に依り頼み、主のみ言葉に聞き従ったのです。その信仰によって、息子は死の病から解き放たれて、命を与えられたのです。

親にとって、自分の子が病や怪我に苦しんでいる姿を見るほど、辛いことはありません。代われるものなら、自分が代わってやりたいと思うほどです。お腹を痛めて産んで育てた母親は、父親以上に子どもの痛みや苦しみを、深く担い傷つくものです。

古代の最大の教父と言われるアウグスチヌスは、『告白』という書物の中で、青年時代の荒れ果てた自分の姿と母モニカの信仰について詳しく述べています。

アウグスチヌスは青年時代、マニ教という異端的な教えに取りつかれ、放縦で快楽的な生活におぼれ、どうしようもないふしだらな生活を送っていたようです。本人自身、そこから抜け出そうともがいても、どうしようもない不安と虚しさから抜け出せない状態であったようです。敬虔なキリスト教徒であった母モニカは、わが子のために毎日、泣きながら祈り続けていたそうですが、ある時、耐えられなくなって、教会の司教に相談したしたそうです。その司教は「そのような涙の子は、滅びることはない。祈り続けなさい。あなたの子は必ず生きる」と言われたそうです。彼女はその言葉に慰められ、さらに祈り続けたそうです。「わが子を生き返らせてください」と。アウグスチヌススは、その母の祈りの姿をみて、心揺さぶられ、ある日、子どもたちが外で「取りて読め、取りて読め」という遊びの歌を聞いて、これは聖書を開いて読め、という神の声ではないかと悟り、久しぶりに聖書開いてみたそうです。その箇所はローマの信徒への手紙 13 章の「夜は更け、日は近づいた。だから闇の行いを脱ぎ捨てて、光の武具を身につけましょう」(12 節)というみ言葉だったというのです。彼はこのみ言葉に目が開かれ、信仰に立ち帰り、司教になる道を歩み始めた、と述懐しています。

母モニカの信仰と涙の祈りが、若きアウグスチヌスを「死」から「命」に甦らせるきっかけになったのです。　迷いというものは誰にもあるものです。そしてその迷いの中で、生きる意味や目標を見失い、肉体的にも精神的にも、死んだような状態になることがあるものです。そういう時に、親の祈り、家族の支えがどんなに大切か、ということをしみじみ思わされます。

今の時代、親・子の絆や、家族の絆がほんとうに脆くなってしまったような気がします。それぞれが、本当の意味で自立して、お互いの立場を尊重して、干渉しないということは大切ですが、それぞれの痛みや悩みを共に担い合い、共に祈り合うつながりは、大切にしなければならないように思います。

この聖書の箇所の結び (53 節)に、このカファルナウムの父と子とその家族のその後について、こう記されています。「そして、彼もその家族もこぞって信じた」。

主イエスが語られた「あなたの子は生きる」というみ言葉が、死にかかっていた子に命を与え、その家族・家庭全体に信仰による新たな命と喜びを与えたのです。

水をぶどう酒に変え、喜ぶ者の喜びを一層深い喜びに変えてくださった主は、泣き悲しむ者の悲しみと恐れを、大きな喜びと希望に変え、信仰による新しい家庭を生み出したのです。　わたしたちも主イエス・キリストを信じる信仰によって、そのような主の恵みに共にあずかりたいと願います。　　アーメン